

以上のように、これらふたつの立場は全く異なったものであるが、歴史的経緯としては、両者は相互に影響しあいながら発展して行った。とくに前者から後者への影響には著しいものがあり、ストアの人々は自らとは立場を異にするアリストテレス論理学の影響を様々な仕方であらった (e. g. SVF II. 83 と *Anal. Post.* II. 99b 35ff. を比較せよ)。そしてこれら両者の立場は、内に矛盾を孕みつつも、相互に区分されることなく、混合したまま、後世の学校文法の教科書や論理学の著作の中へと流れ込んで行ったのである。たとえば、ストア論理学の基本的定義である「問答法とは、真と偽、および真偽いづれでもないことについての知識である」という命題 (Diog. Laert. VII. 42) が、論理学のアリストテレス的枠組みと共に、若干の変容を受けながら、紀元 4～5 世紀のラテン文法学者や後世の論理学の教科書に伝承されていったのはその一例といえよう。

したがって、〈普遍論争〉や神の〈存在論的論証〉などの問題を考察するに際しては、当該著作家たちのテキストを、ただそれ自体として、歴史的な脈から切り離して読むだけでは不十分であると考えられる。これらの問題の考察に際しては、個々の問題のアリストテレス論理学の伝統との関連、およびストア論理学との関連が精密に区別されなければならない。アリストテレス論理学の根底をなす認識論・存在論と、ストア論理学の根底をなすそれとのダイナミズムの中で〈普遍論争〉や神の〈存在論的論証〉の問題が見られるとき、はじめて事態が明確になるのではなからうか。

## 意見 vox と verbum

清水 哲郎

岩熊氏が現時点で知られている最先端の資料に基づいて、「11 世紀後半になってはじめて、『イサゴギーで論じられているのはもの (res) についてであるか、それともことば (vox) についてであるか』が論じられるようになり、後者の立場をとる人が *vocales* と呼ばれ、その立場の延長線上に普遍に関する唯名論的主張が現れる」

と指摘されたことからはじめよう。これは興味深い事実の指摘である。私はさしあたって、これをアベラールに先立つ状況として受けとめて、考えてみたい。確かにアベラールもイサゴージェ冒頭の普遍に関する問いを論じるときに、それがものの割に帰せられるのか、それともただ音声 (vox) ——アベラールの文脈ではこれを「ことば」と訳すと誤解を招く虞があるので「音声」としておく——に帰せられるのか、という枠組みではじめる (9. 16)。これは指摘された上述の状況を背景として認めるときに、もっともな始め方である。ただし、アベラールはそこからさらに、音声に《ものを名指す》という *nominatio* ほかに、《理解を構成する *constituere intellectum*》という狭義の *significatio* を認めることによって、ものか音声かという問題の枠を越えたのであった (19. 7-20)。これに伴い、アベラールは『イサゴージェ』に続いて行う『カテゴリー論』および『命題論』注解のそれぞれの冒頭部分で、それぞれが扱うのは《ものについてか、それとも理解についてか》を論じる (前者はものについて、後者は理解について論じていると結論する) こととなった——これは岩熊氏の上述の指摘に対応する事実だといえよう (113. 30-33, 307. 24-309. 35)。いずれにしても音声ないしことばがそこにあるのは確かである。その上で、そのことばがものを名指すものとして扱われているのか、それとも理解を構成するものとして扱われているのかが差異化したことになる。——岩熊氏の指摘する状況からアベラールへの線をひとまず、こう理解しておこう。

次に、古田氏の主張された、アンセルムスにおいては存在論的次元に関わる《*res-verbum*》という二項的枠と、意味論的次元に関わる《*res-intellectus-vox*》という三項的枠が並存しているという点に注目したい。まず、『プロスロギオン』第 2～4 章の議論を見直そう。そこには神の存在に関する「ただ理解の内にのみある (*est in solo intellectu*) のか、それともまたもの内にもある (*est et in re*) のか」という問題の立て方が見出されるが (101, 16-102. 3)、それはポルフィリオスの普遍に関するいわゆる第一の問題の立て方 (*siue subsistunt siue in solis nudisque intellectibus posita sunt*) と対応していることを指摘したい。この問題の立て方には音声=ことば (vox) は登場しない。確かに「愚かなものも、…聞いて理解する」と言われており、そこで聞かれるのは「それより大いなるものが…」との音声ではあろう。しかし、ここにあるのは、「この音声=ことばは何を表示しているか」ではなく、「それが表示しているものは如何なる存在の仕方をしているか」という問題意識である。この問題の

立て方は 11 世紀後半の論理学のそれとも、アベラールのそれとも異なっている（いわばポルフィリオスの普遍に関する問題の立て方に直結する系統と言えるかも知れない）。

また『グラマトイクスについて』における、名称「グラマトイクス」はグラマトイカを表示する機能を帯びており（significativum）、人を指す機能を帯びている（appellativum）という点についていえば、ここにあるのも上述の三項的枠というよりは、名称（nomen）とその意味するもの（res）という枠であろう。例えば、「人」はその定義に現われる要素（実体・動物・理性性・可死性等）をそれ自体で表示する（156.26, 157.12）。他方、個々の文脈に応じて「人」はそれぞれ誰かある個体実体を（156.31）、また「グラマトイクス」も事実上誰かある人を指す、ないしは他のものを介して表示する（157.2, 3）、いずれにせよ、表示され、あるいは指されるのはものである（そのものがどのような存在性格であるかはまた別の問題）、名称は「表示機能を帯びた音声」であると認める（161.15）とはいえ、アンセルムスは名称を音声次元ではなく、理解の次元で把握した上で、それが何を表示し、何を指すかと考えている（cf. 149.11-14）。

以上のような検討から、アンセルムスは結局はあくまでもことばを聞く私の理解という場面で考えており、言い換えれば古田氏の言われる *res-verbum* という二項的枠で一貫しているのではないかと私は考える。もしそうであれば、アンセルムスには *vocales* が問題にしたような *vox* への顧慮はなかったといえるだろう。というのは、アベラールの《もの-音声》という問題局面の扱いから推察する限りでは、*vocales* は音声=ことばを公共的言語として把握したうえで、公共的な場面で考えようとしていると思われるからである。これらの論点が認められるならば、お二人が提示されたことのうちに、11 世紀における《ことば》把握の対照的な二つのあり方——“*vox*”と“*verbum*”と呼んでそれぞれを特徴づけたい——を見ることが許されよう。

アベラールの引用は Geyer 編の *logica 'ingredientibus'* の、またアンセルムスの引用は Schmitt 編全集第 1 巻の頁および行数で示してある。